

SESSION 2012

---

AGRÉGATION  
CONCOURS EXTERNE

Section : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES  
LANGUE ET CULTURE JAPONAISES

VERSION SUIVIE D'UN COMMENTAIRE GRAMMATICAL

Durée : 6 heures

---

*Documents autorisés : Dictionnaire Kôji-en, Iwanami, 1983, et rééditions; Dictionnaire Taishûkan kango shinjiten, Taishûkan, 2001, et rééditions.*

*L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel électronique (y compris la calculatrice) est rigoureusement interdit.*

*Dans le cas où un(e) candidat(e) repère ce qui lui semble être une erreur d'énoncé, il (elle) le signale très lisiblement sur sa copie, propose la correction et poursuit l'épreuve en conséquence.*

*De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, il vous est demandé de la (ou les) mentionner explicitement.*

**NB : Hormis l'en-tête détachable, la copie que vous rendrez ne devra, conformément au principe d'anonymat, comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé comporte notamment la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de signer ou de l'identifier.**

Tournez la page S.V.P.

1) Traduire en français le texte joint.

小森陽一「小森陽一、ニホン語に出会う」2000年。

2) Étudier dans ce texte les différents emplois de の.

## 第一章 ことばとの出会い

東京・ブラハノ小学校時代

### 記憶のなかから

人がことばと出会うのはいつなのでしょう。自分がいま日常的に使っていることばを、いつどのようにして獲得したのかについて、はっきりした記憶を思い起こすのは大変難しいことです。とりわけ、自らの言語獲得の最も初期の過程については、親が詳細な記録でもつけていない限り通常は知ることができません。

このもどかしさは、記憶それ自体の主要な部分が、ことばに負うところが大きい、ということにもかかわっているのではないのでしょうか。知覚感覚的な経験は、ことばの力を借りなくても記憶に刻まれているものですが、知覚感覚的な経験それ自体を思い起こすことは、もう一度その経験の中に入り込み、それを生き直すことです。対象化することは困難です。記憶を

その引き出しから自由に出し入れするためには、それを終りと始まりがさだかでないような知覚感覚的印象から、いったんことばによって切り離して枠組みを与え、あるまとまりをもった出来事として他の経験から切りとり、一定の形をもったものにしておかなければなりません。

その意味で、人がまだ十分に自らの経験を言語化する能力を持っていない時期の記憶、個人差はあるとしても、言語能力を獲得しはじめる一歳からおおよそ三歳ぐらいまでの記憶は、私たちにとってきわめておぼろげで明瞭さを欠いたものにならざるを得ないのです。ですから、私たち自身がどのようにことばと出会い、それを使いこなせるようになったかということが記憶の中に残ることは、残念ながら、きわめて稀なこととならざるをえません。

### ブラハのロシア語学校へ

私の場合、幼少期に、それまで親や家族や社会の中で習得しつつあった、通常「母語」と言われている言語とは異質な言語の中に投げ入れられたために、「母語」を習得するときとそれなりに類似した過程を、一定程度記憶に残す形で保存しておくことができました。

父親の仕事の事情で、私は小学校低学年の段階で、いまはチェコとスロヴァキアに分裂してしまった、旧チェコスロヴァキアの首都ブラハで生活することになりました。通うことになった学校は、ブラハにあるソヴィエト大使館付属のロシア語学校でした。生徒の大半は、ソ連の

大使館員をはじめとする、外交関係の仕事をしている人たちの子どもたちでしたが、アラハには、いくつかの国際組織があり、そこに勤務している各国代表の子どもたちも、その学校に通っていました。授業はすべてロシア語で行われていました。

ロシア語学校に通うことは、日本を出る前から決まっていた、数か月間、家庭教師を頼んで、ロシア語のアルファベットがなんとか識別でき、初歩的な会話の断片ができる、という状態で、いきなりロシア語だけの生活に入ることになりました。思えば、モスクワに着くまでの船と汽車の旅の間、ほとんど使い道のない「ダーイツェ・ムニエー・スタカーン・ヴァデー」（一杯のお水を下さい）というロシア語がうまく言える、とロシア人にほめられたりしましたが、実践的に役に立つような形でロシア語を操ることはできませんでした。

アラハでの暮らしの当初は、ほとんど非言語的な世界につき落とされたような印象でした。なにより問題だったのは耳の構造で、ロシア語で話される声を、ことばの単位となるような音声として聞き分ける耳を自分は持っていない、ということに愕然としました。とにかく、耳を澄まし、ロシア人の子どもたちが話しかけてくる声に、なすすべもなく対応する、という日々がしばらく続きました。けれども、ことばに対する恐怖感のようなものは、わりとすぐに消えていきました。子どもの世界のありがたさで、ことばを介在させなくても、身振りや手振りといった非言語的な記号、あるいは絵を描くことによつて、かなりの意思疎通ができることがわかってきたからです。

たとえば、第一日目が一番困ったのは、トイレの場所がわからなかったことです。がまんの限界まできて、隣の子にしかたなく日本語(?)で「トイレ！ トイレ！」と必死で訴えたのですが、相手はキョトンとしているだけ。たまらなくなつて立ちあがつて股間をおさえて足をバタバタさせると、ナンダというようにうなずいて、トイレまで連れていってくれました。ロシア語でも「トイレ」のことは「トゥアレートク」と言うのですが、通じなかったのは、私が「エル」の発音を「アール」の音で発声していたからだったようです。

### ロシア語の世界とクラス・メイトたち

クラス・メイトたちは当初とても親切で、最初の一週間ぐらいは、カバンの中に入っている学用品の名前を指さしながら教えてくれたり、給食に出てくる食べ物の名前を一つ一つアオークで突き刺しながら教えてくれたりしました。たしかに、現実世界に実在し、目で見ることができ、手で触ったり、舌で味わったり、鼻で嗅ぐことができるモノやコトをめぐることばに関しては、そうやって憶えていくことが可能でした。しかし、ことばの世界には、現実世界で確認できないことばの方が、はるかに多いことは周知のとおりです。そうしたことばの使い方を習得するには、とにかくロシア語を話しているクラス・メイトの一挙手一投足と、そこで発話されている音声との関係を観察し、耳をそば立てつつけるしかありません。ことばが発せられる一つ一つの場面に対して、異様に敏感になり、細かな観(聴)察をする癖ができました。

おそらく「母語」を習得しはじめるときの、一歳以後の幼児たちも、きつとそのようなようにして、周囲の大人がことばを発する場面を、はかり知れないような注意力で観察し、どんなときに、どんな状況の中で、どんなことばが発せられ、その結果どんな事態が発生するか、といったようなことを、必死で捉え、記憶の中に書き込んでいるに違いありません。ある場面で使われたことばの意味を、大人たちが説明してくれるわけではありません。ことばの習得は、ことばの意味がわからなくても、とにかくそのことばを実践的に使ってみる体験からはじまるのではないのでしょうか。自分の発したことばが周囲の人々に受け入れられたなら、その使い方がまちがっていなかったことを知り、以後、そのような文脈の中で同じことばを使うようになっていくのではないかと思います。

もちろん、子どもの世界では、大人の真似をすることに、多分に遊びや戯れ、あるいはしゃれあいの側面がありますから、さほど苦もなく、大人になつてから考えると信じられないほどの複雑な認知操作ができるのだと思いますが、学齢期に達していた私の場合、かなり抑圧が強くかかりました。ことばの使用方法をまちがえると、侮蔑的に嘲笑されますし、突然けんかごしになられたりします。